第８回 第２次瀬戸市教育アクションプラン推進会議
議 事 録

日　時：平成 30 年 7 月 25 日（水）午後 3 時から午後 4 時 45 分まで
場　所：瀬戸市役所 4 階大会議室
出席者：
＜会長＞上川 和子
＜副会長＞吉田 淳
＜委員＞一尾 茂疋、太田 亜衣、加藤 髙明、加藤 直樹、中崎 毅、西原 勇、深見 和博、福岡 明、福田 直美、舩坂 礼子、水谷 友里、弓削 善靖、和佐田 強（５０音順）
＜オブザーバー＞藤井 邦彦（市長直轄組織参事兼まちづくり協働課長）、田口 浩一（スポーツ課長）、上田 喜久（社会福祉課長）桂川 和也（子ども未来課課長補佐兼子ども未来係長）
＜事務局＞涌井　康宣（教育部長）、松崎　太郎（教育政策課長）、白木 秀典（学校教育課長）、早川　寿（学校教育課主幹兼指導主事）、阪本 有一（学校教育課主幹）中桐 淳美（図書館長）、深谷 大輔（教育政策課専門員兼指導主事）、幸村 弘美（教育政策課企画係長）、水野 華（教育政策課企画係）

議事録：

（会長挨拶）
夏休みに入り、子どもたちは学校開放のプールを楽しんでいた。暑さの関係でプールを中止するという話もあったが、学校の方々が体調の管理などをしているおかげで子供たちもプールに入れている。今回出来上がった平成 30 年度瀬戸市教育委員会事務の管理及び執行の状況の点検・評価報告書は、皆様からの意見を真摯に受け止めて掲載している。円滑な議事進行にご協力をお願いしたい。

審議事項
(1)平成 30 年度瀬戸市教育委員会事務の管理及び執行の状況の点検・評価　報告書（案）について
企画係長より資料に基づき説明。

○委員
基本政策 13 の「瀬戸らしさを活かした特色ある教育の推進」についての要望です。

小中学生の職場体験について、30 年ほど前に職場体験が始まってから受け入れ先の意識はずいぶん変わってきていると感じる。瀬戸のキャリア教育にかかわった子供たちのことについては報告をもらうが、受け入れ側の大人たちの意識の変化や状況ついてどこかで評価していただくといいと思う。

また、基本施策 15 の未来を生き抜く子供の育成の外国語活動について、P 54 の今後の方策等の外国語活動について「瀬戸独自のカリキュラムを作り今年度から運用する」とある。今年の 1 月に発表された一貫校のカリキュラムの中間報告では「1 年生から 9 年生までの 9 年間を見通した系統的な英語教育を展開する」とある。母語の獲得を保証されている状況では、外国語活動は早く始めるべきだと私は考えている。しかし、英語教育に関する本を読むと、外国語教育を早く始めることに否定的な意見があった。その本では、バルセロナで英語学習の開始時期と習得状況の関係について研究したものだった。開始時期が 8 歳、11 歳、14 歳、18 歳以降の 4 つのグループの子どもを対象に、英語学習を 200 時間、416 時間、726 時間を終えるたびに習得状況を分析する研究をしていた。結果は、遅くから開始したグループのほうが習得の度合いが高く、発音などの音声関連のテストでは、開始年齢による影響は見られないという結果が出ていた。一般に幼い子供のほうが音声習得に優れている印象を持っていたが、開始年齢よりも受けた授業時間数の方が影響があると書いてあった。韓国の初等学校の英語教育では実証研究をもとに 3 年生からの開始となっている。瀬戸で 1 年生から英語教育を始めるのは、英語の力をつけたいことは違う狙いがあるのではと思い、カリキュラムの特徴などを教えていただきたい。

○事務局

職場体験について感じているところでいうと、職場体験を始めた頃は、受け入れ先では従業員が小中学生の面倒を見る、という意識であったと感じていた。しかし最近では社会貢献ではなく、社員教育の一環でもあり、基本に立ち返ってどうあるべきかを確認する場という意識で受け入れていただいていると感じている。また、数年後には社会人になるという子どもたちを、瀬戸の人材という目で見ていただいているという意識の変化は明らかにあると実感している。

○会長

自分の子育ての経験でいうと、受け入れてくれる会社の人たちが、子どもたちを一定の期間だけ受け入れればいいと思っているわけではないというのを感じた。毎年子どもたちが来るけれども、受け入れる側の方でも子どもたちがどうやって職場体験の時間を過ごしていくのかを、より子どもたちが主体的に考えられるよう声掛けをしていたり、色々な準備をして迎えてくださっていると感じた。職場体験を行っ

ていることが浸透することによって受け入れる側の気持ちが、この時期に子どもたちが来るという 1 年の中の１つの行事としての意識ではなく、去年も来年も再来年もその次も来るので、長い年月の中で今年はこんな形で、来年はこんな形で、と少しづつ変わっていると感じる。

○事務局

小中一貫校のカリキュラムについてという話であったが、実は小学校 1 年生は本年度から外国語活動がはじまっている。習得というよりは、子どもたちが英語や文化に慣れ親しむことを目的にしてカリキュラムを組んでいる。具体的には、あいさつや天気、数字など子どもたちの身近にある教材や話題を使って、歌やゲームなど体験的な活動を通して、楽しみながら英語や外国文化に親しめるようにしている。そのような形で 3・4 年生の外国語活動につなげていきたいと考えている。

○副会長

外国語活動について自分の経験から言うと、耳からどれだけ英語を入れるかというところから入っていく。そういう点では小 1 の段階から読む・話すではなく、ゲームや歌でアクションを通じて聞くということから英語を入れていくのはいいと思う。その上で、それに対してきちんと必然性をもって外国語に親しんでいけるようなカリキュラムを組んでいくのが必要と考える。フィリピンでは長い間バイリンガル政策をしていて、小学生のうちから数学と理科を英語で教えているが、数学や理科の国際的な学力は最低水準である。その理由は、小学校のうちから英語で数学や理科を教えると基本概念ができないという苦しみがある。社会や国語は母語でやっており、日常生活は母語を使っている関係もあって、数学や理科の基本概念ができていない。大人になってくると、基本概念の習得に成功した人たちが英語を使って活躍できる社会になってしまって、母語を話せるけれども英語がちゃんと定着できなかったまま大人になってしまった人たちは、知識的な仕事にはなかなか就労できない。したがって瀬戸市でやっている 1 年生と 2 年生の教育では、耳に慣れることを中心として行っていくことが良いと考える。学習指導要領も 3 年生以上は外国語活動や英語が積極的に出てきているのでその方向でよいと考える。

○教育長

32 年度から小中一貫教育を進めていくが、学級経営であったり道徳であったり基礎基本を徹底して、使えるようになることがベースである。しかし、小中一貫教育として 9 年間を見通す中で、1 年生からスタートする理由としては、語学という視点よりも学級経営的な視点が必要で、学級経営をきちんとできるということが、新し

い内容を導入しても、それに対して子どもたちが受け入れていくという面がある。低学年の先生も英語ということで、視点を持ってもらって 9 年を一緒に指導していくというストーリーが大事ではないかということが、今回導入したきっかけの１つとしてある。

○委員

小中学校で英語を教えてきたが、小学校の内は英語を楽しく勉強しているが、中学校になったとたんに、クエスチョンマークやピリオドがないといったような少しの間違いで×にされて、英語が嫌いになるということが多々あった。学術的な方向へゆるやかに、例えば5・6年生ぐらいから英語を書くという作業をさせていたほうが、子どもたちも納得するのではないかと思う。私は外国語学部で英語専攻であったが、最近は、英語を書かなくなっている。書くなら翻訳サイトのほうが早く、海外旅行程度でも翻訳機があれば英語を話せなくてもよくなった。何のために外国の文化に触れるのかという視点を、教える側も持っていないと子どもたちも実感を持てないまま学ぶことになってしまうので、それを踏まえたうえでの英語活動が必要と感じる。小中が連携して、せっかく好きになった英語を嫌いにさせない施策をお願いしたい。

○会長

子どもたちが楽しく耳で聞いて、覚えて、聞いたまま歌う状態から、実際にそれが英語の言葉として並んできたときに、誰かに教えてもらって覚えるのではなく、自分が今まで発音してきた言葉が文字になって、これはこういう単語なんだというように、子どもたちが自分で言葉を覚える喜びを自分から身に着けることができ、それが励みになって英語が一層好きになっていくような形で、途切れることなく英語教育をやっていけると、瀬戸市が目指している教育になっていくと考えている。

○副会長

大事なことは、学校は変わっていくということである。瀬戸市に関しては小中一貫校ができるということで、そこではほかの学校との関係も出てくる。これについて、瀬戸市は特殊な環境であると考えている。小中一貫校がより良いものになってほしいという希望と、それを梃に瀬戸市の小中学校が一生懸命になってくれることが必要と感じる。もう 1 つ気になることとして、私立の中学校に行くのはメリットもあるが、それぞれの中学校の魅力を打ち出すため学校全体で議論して作っていくのが必要と感じる。子どもの数が減っているということがあり、私立の学校で生徒の確保のために様々な取り組みをしている。公立の学校がどう思われているのか捉

えることが大事である。中には名古屋の私立に行く人もいるが、瀬戸は瀬戸らしさ、良さ、先生が頑張っているというものが何かというのを考えていただきたい。公立学校の先生は働き方改革で勤務時間の縮減が課せられた課題としてあるが、そうなると、良いものを作り、でも時間は少なくしろと言われた時に先生たちはどうするかというのが大きな課題としてある。そこをどう配慮して作り上げていくかというのが、瀬戸市がどこまでより良い人材を有効に使いながら、そういうものを形成していけるかというのが課題だと感じている。長期的なビジョンをもってそういったことに立ち向かっていくことが必要であるし、学校間の連携だけではなく地域や大学との連携もうまくとっていくことによって、より特徴のある良いものを作っていただきたい。また、保育園や幼稚園ともうまく連携を取っていくことで、将来につながっていくのではないかと考えている。

○教育長

瀬戸らしい教育とは、アクションプランそのものだと考えている。具体的には、特別支援学校・教育があり、瀬戸市全体でも福祉に力を入れているので縦つながりもできており、大学との連携、福祉との連携もできている。また、食育も、キャリア教育も、積み重ねてきた財産は大きい。平成 32 年という 1 つの大きな見せ場をきっかけにして、もう一度良さを出していきたい。連携、協働というのはなかなか壁が厚かったり、敷居が高かったりするが、学校間というだけではなくて、人と人との壁を無くすというのが大きなチャレンジではないかと感じる。委員の皆さんに書いた意見を十分に活かしていって、それぞれの学校が特色を出せるようにしていきたい。

○副会長

尾張西部のマンションの若い世代の方は、いい保育園・幼稚園があるというのがその市に定着するのに繋がっている。行政以外で、素晴らしい施設や考えを持ったところがあると、一戸建ての家を建てるためにそちらの方に転居して、結局幼稚園ぐらいから小学校ぐらいの人口は市外の方に出てしまうというケースがよくある。それを考えると幼稚園の方も、魅力ある幼稚園で小学校とうまく連携しているところが見えてくると、若い世代の人はそのままそこで住みたい、そこの幼稚園に行きたい、小学校に行きたいという気持ちになる人が多いと感じる。教育の問題というのは、保護者、特に若い世代の保護者にとっては非常に大きな課題で、良いことをやっている幼稚園があると、その近くに住みたいということが必ず出てくる。それを幼稚園独自で考えるのも大切とは思うが、小学校との連携もうまくいっているのが見えてくると、小学校も魅力があるということになって、その市に住むことに意

味があると感じてもらえると思う。

○委員
　勤務先は私立の幼稚園なので上述のことはよくアピールしている。私立なので、まずは選ばれるというのが大切と感じる。保護者の方に「あそこに預けたい」という思いを持っていただけるように、幼稚園の運営については一生懸命取り組んでいるところである。

○副会長
　保護者の方が幼稚園、保育園を選ぶ視点というのは様々あると思う。何が、ということになると、それぞれの園が持っている特徴だと思う。もう１つが、中でどのようなことが行われているか、保育としてどのような形のものが行われているか、うまく表に出せる環境なり、園の先生方の力なりということになってくると思う。そういった意味では、公立の幼稚園では、公立だからこそかもしれないが、先生方が持っている力をうまく引き出すためどうしても小学校との関係を作っていきたいというのがあった。様々な活動を取り入れてきたのも、バランスの取れた保育を目指した教育と研究を積み重ねてきたということにある。漠然としているのは何故かというと、ユニバーサルにすべて言えるかといえば大変難しいし、そのことが保護者の方に理解いただけることなのかどうか非常に難しいところでもある。漠然とした言い方しかできないが、幼稚園や保育園が魅力的であり、連携の様子が見えてくるということは、保護者にとっての魅力になっていくと思う。ただ、大変難しい課題ではある。

○委員
　難しい課題ではあるが、必要なことである。近くの西陵小や水野小、水野中などとうまくやっていくことは大切だと思う。

○副会長
　全国でもその連携がうまくいっているところはあまりない。しかし、瀬戸市に独自のおもしろさを作ることが、他の市にはないプラスを出していただけるのではないかなという期待がある。

○委員
　うまくいっているところでは、どういったところがあるのか。

○副会長

教育方針にある程度一貫性があるということにある。それぞれの園は特徴があるというのは分かるが、園の特徴がありすぎるというのは小学校とのギャップが出てしまう。ギャップが無いようなつながりをうまく導いていくのが大切である。また、幼稚園の年長と小学校１年生がやっていることを比べると、そのレベルは同じか、または小学校１年生のほうが低いレベルをやっているということがある。このような事態を考えると、１つは年長から小１につながっていく大きなつながりのパイプがあるのだなと感じていただけるのではないかと考えている。例が具体的ではないので難しいかもしれないが、幼稚園の方がそれぞれ頑張っている部分と、持っている特徴を両立して活かしていくという難しさがある。そういう点は、小学校側も保護者の方も気になっているのではないかと思う。それから幼稚園側の立場から言えば、幼稚園の独自の方針や考えをうまく出さないと、なかなか入園していただけないというのも分かるので、そういったものを調整していきながら進めていくとうまくいくと思う。

○会長

今、都会の方では騒音の関係で幼稚園、保育園を建設するのを反対するというのをニュースで見る。自分の住んでいる地域に子供の歓声が響き渡っている状態や、子どもたちが手をつないで散歩や遠足をしたりする姿が微笑ましく宝であるし、誇りであると思えるような地域作りをやっていくことが、小１ギャップを無くすことにつながるだろうと思う。また、見守ってきた子どもたちが小学校に上がったときに、この子はこんなに大きくなったのだという目で、地域の方が見てくれることが大事だと思う。それが他市の子であろうと、子どもはみんな同じであり、大人も心が成長していく過程であると思う。

○委員

安心で安全な学校作りということで改修等を進めていると思うが、豊田市の件もあり、エアコンの設置が全国で問題となっている。その件は瀬戸市としてどのような考えを持っているのかお聞きしたい。

○事務局

年単位のペースの中で、もともともう少し先にエアコンを設置する計画があったが、それを前倒しという形で、設置する手筈を組んでいる。本来であれば一度に全部設置するというのが理想だが、なかなか難しい。ただ当初の計画よりも少しでも早く、取り組んでいきたいという考えの中で、検討している。

○委員

中学校１年生の入学間もないころに好きな教科、嫌いな教科を聞く機会がある。その時に嫌いな教科は英語という生徒がよくいる。「君たちはまだ英語はやってない、今までは外国語活動だよ」と言ったことがある。小学校の先生でも、外国語活動を英語で行うのはとても難しい。大学時代でもそういった勉強はしているわけではないので現場に来てから外国語活動が始まっていて、外国の文化に興味を持たせるという本来の目的をなかなか達成できずに苦労している。今度は英語が始まって、自分自身も小学校の先生方は大変だと思うが、英語という教科の方が教えやすいのではないか思っている。音声だけのやり取りというのは学校としてはやりづらいものがある。これから教科として英語が始まって、瀬戸でもいろいろな取り組みが始まっていく。明後日からニュージーランドに行く子どもを連れていくことになったが、多面的な英語の指導というのが整いつつあるので、これから瀬戸で英語がより発展していくと思う。

○会長

原案通りで公表することを承認する方は拍手をお願いします。

＜拍手多数＞

○会長

承認いただきましたので、今後 8 月定例教育委員会に上程し承認後、瀬戸市議会に報告し、市民の方に公表することとなります。

2 報告事項

(1)教育市民フォーラム「キミチャレ 2018」応募・選考状況について

教育政策課企画係長より、資料１に基づき概要説明。

○委員

キミチャレは今年 7 年目になるが、やる気ある子どもたちに接してきた大人たちが変わってきたというか、上述のように職場体験で事業所の受け入れ態勢が変わってきた。子どもたちが大人を育てている様子、これを学校教育の中の授業ではなくて日常的にどこかでやれないかというのを思っている。今は大人が学校教育の中に入っていっているのを、学校の授業時間ではないところで一般的にできるようになれないかと考えている。それこそ幼稚園、保育園でできるようになればきっと保護

者の方や市民の方はわかるようになる。当面は学校の教育活動、保育園幼稚園の活動の中に地域の人や大人が関わっていくのは必要なことかもしれない。しかし、自分としてはそこから離れて、学校ではなく休みの日に日常的に、具体的には自分の家でそういったことができるようになればいいなと思っている。この事業をやったことで大人がどんな風に変わったかということを、少しでもいいのでＰＲしていくことをお願いしたい。

○会長

子どもたちから学ぶことはたくさんある。目の前で楽しそうにしている子どもたちを見るだけで、自分が幸せになることがある。実際、キミチャレなどで子どもたちが変わっていくプロセスをしっかりまとめたものを、発表会では見ることができる。委員の方々もぜひ発表会を見ていただいて、子どもたちの様子を自分自身の励みにしていただきたい。

3 その他

次回の会議開催日程は未定。